オオルリシジミを守る②

北御牧小学校 クラブ活動

飼育・保護教育を通じて生命の大切さを育む

オオルリシジミの保護活動の一環として、北御牧小学校では、平成15年度（2003）からオオルリシジミを飼育しています。

オオルリシジミを育てるぞ（H15年度）

「北御牧小学校でオオルリシジミを育ててみないか・・・」

旧北御牧村教育委員会から話が持ち上がったのは、東部町との合併協議がまとまりつつあった昨年の平成15年4月。

小学校は、この申し入れを快く受け入れました。絶滅危機にあるオオルリシジミを育てることは、オオルリシジミ保護活動につながるだけでなく、子どもたちが生物を愛する心を育む一つの取り組みになるからです。

「聞いた時はいったいどんなチョウなのか想像がつきませんでした。ただ一つだけ分かっていたことは、絶滅危惧種のチョウということとだけでした・・・。」担当を任された内田先生は話します。

さなぎになったよ！（黒いのがさなぎ）

内田先生は4、5、6年生を対象にクラブ活動の一つとして希望者を募りました。

「一度見てみたい」「ぜひ育てみたい」とたくさんの子ども達が関心を持ちはじめていました。

平成15年度に集まった児童は約30名。まず、1年目ということから、チョウを育てる部屋を作ることから始めました。コンテナにクララを植え、網（ネット）をかけ、守る会からいただいたさなぎ60個を放しました。

子ども達はオオルリシジミをはじめて見てからは興味津々。さなぎを見た子ども達は「黒い豆粒みたい」と不思議そうに眺めていたのです。

その黒いさなぎが殻を破って羽化しはじめると子ども達は大騒ぎ。

「すっごくきれい！」「こんなチョウが出てくるのがほんと不思議！」目を輝かせながら先生に話し掛けました。

さなぎの殻から出たばかりのチョウの羽はちぢこまったままです。そしてチョウは高い所によじ登りじっと羽を伸ばし、羽が乾くと元気よく羽ばたいていきます。次々とチョウが羽化し、見るみるうちに飼育箱はいっぱいになりました。

次に、守る会の手助けも借りながら卵を育てました。ようやく目を凝らしながら見つけた卵は1㎜にも満たない小さなもの。容器に分けて育てた幼虫はとても食いしん坊で、クララを与えてもすぐに食べ尽くしてしまいます。それだけにウンチもたくさんするので、子ども達は敷いてあるティッシュを毎日変えなければなりません。クララをあげて、ティッシュを替えたり・・・、

内田（うちだ） 滋（しげる）さん

平成15年から北御牧小学校へ赴任。現在は理科の専任教諭として子ども達に教えている。生物の保護活動にも関心を持つ。「オオルリシジミを通じて児童が生物を愛する心や自然を保全する気持ちが育ってほしいですね。」と話す。

チョウの部屋（コンテナ）にある脱脂綿に水を与える児童

もくもくと世話を楽しみました。

そのうちに幼虫は2センチ近くまで大きくなり、これまで黄緑色だったのがピンク色に変色します。これは「さなぎになるよ」の合図。

その後、幼虫は動かなくなり、白くなり脱皮してから、黒いさなぎへと変わっていくのです。

子ども達は休み時間や放課後、下校までの時間を有効に使い、飼育にいそしみました。

130個の卵のうち64頭がさなぎに

守る会からいただいた130個の卵は、子ども達が丹精込めて育てあげたにもかかわらず、さなぎになったのはわずかに64頭。天敵に食べられる心配のない容器で飼育したのに、半分に減ってしまったことに、子ども達はとても残念がりました。

「何で死んじゃうの？」「わたしのも駄目だった」悲しい声が先生に届きました。

しかし、子どもたちはその状況に目をそむけることなく、来年にこの経験を生かそうと前向きに考えました。

このことを守る会に報告した時、「卵の半分が無事育てられたらいいほうだ。64匹の命を救えたんだよ。」と守る会から逆にうれしい一言が返ってきたのです。

2年目の挑戦（H16年度）

そして2年目の今年、児童も昨年に引き続いて入ってくる子、新しく育てる子が加わって、35名の子ども達の活動が始まりました。

2年目の内田先生も頑張っていました。それは、昨年初めてオオルリシジミの生命力の弱さを知り、そのことが児童の心に響いたからです。

今年の活動は、チョウの観察を中心に、チョウの世話をする、交尾をさせる、卵を産ませる、さなぎにさせるといった基本的なことを毎日続けることが出来てくるのがほんと不思議！」目を輝かせながら先生に話し掛けました。

クラブに参加した子ども達に聞きました。

鳴澤（なるさわ） 健斗（けんと）くん　四年生（下八重原東部）

友達が育てているオオルリシジミをみて感動して、自分で育ててみようと思い、途中からだったけどこのクラブに参加しました。友達に教えてもらったりしてさなぎまで育てたよ！来年もぜひクラブに入りたいと思います。

小林（こばやし） 真二（しんじ）くん　五年生（畔田）

内田先生の授業を聞いてから興味を持ちクラブに入りました。飼育は簡単そうだけど、ちゃんと世話をしないと育たないんだよね。さなぎにまでなったので来年も頑張って育てるぞ！

渡辺（わたなべ） 裕基（ゆうき）くん　六年生（切久保）

飼育は今年で２年目。昨年はさなぎのまま死んでしまい、とても悲しい思いをしたので、今年は一生懸命育てました。さなぎになって本当に良かったです。愛称は「キャタピ」、「ビードル」ってつけたんだよ。

生徒からの作文

四年竹組 鳴沢美樹子（なるさわみきこ）ちゃん（下八重原東部）

「オオルリシジミを育てて」

オオルリシジミはとても数が少なくなってきて、今は北御牧と堀金村と九州の阿蘇だけしかいないのです。オオルリシジミは、小さな青っぽい色のきれいなチョウです。

私は幼虫がきらいなので、育てられるかなぁと最初は思っていました。けれどきれいなチョウを見たかったので、やってみようと思いました。

初めて幼虫を見た時、すごく小さくてびっくりしました。お米のつぶよりずーっとずーっと小さいです。ときどきどこにいるのか分からなくて、いなくなってしまったのかなと思いました。でもクララにつかまっているのを見つけて安心しました。幼虫を育てるのはとても大変でした。毎日、箱にひいてあるティッシュをかえたり、エサをかえたりしました。えさをたくさん食べた幼虫は体が大きくなって、フンもたくさんしました。サナギになった時は、ホッとしました。

この前車中から見たら、草刈をした所にクララだけが残してありました。エサがふえると、オオルリシジミもふえるのかなと思ってうれしかったです。オオルリシジミがふえるとうれしいです。